



## 見えない敵から学んだこと

伊自良中学校3年 田中 乃愛

今日は小学校の卒業式。本当は在校生のみんなに晴れ舞台を見てほしかった。でも、それは叶わなかった。「コロナ」という一つの生物兵器によって。

二〇一九年十二月、世界のあり方を一変させた。ただなんとなく毎日を過ごしていたけれど、ある日、私はこんな言葉を耳にした。「コロナ。」たった三文字の言葉。最初は誰もが大丈夫と思っただろう。しかし、学校が休校になり、緊急事態宣言が発令され、ほとんどの時間を家の中で過ごすことになった。ああ、暇だな。今頃みんな何をしているのだろう。

休校なんてすぐに終わると思っていた。しかし、一週間、二週間と経っていくごとに、友達に会えない寂しさが募っていった。しだいに、家で過ごすことも飽きてきた。

数日後、少し大きめの制服に身を包み、初めて中学校に登校した。友達との久しぶりの再会。マスクごしの友達は表情が分かりにくく、声も聞き取りにくい。今となっては当たり前前の光景だが、当時の私にとっては苦痛でしかなかった。中学校最初の授業は動画での授業。ただでさえ、中学校という新しい環境での生活に不安を感じていたのに、友達をつくるきっかけは失われ、勉強についていけるかの不安だけが膨らんでいった。今までだったら、学校に行くのめんどくさいな、行きたくないなと思っていた。しかし、

コロナによる休校を経験し、学校に行けなかったの素晴らしさを改めて知った。

買い物に行けば、お店が閉まっていたり、スーパーのマスクや消毒液がない状態が続いたり、マスクを買うためだけに行列ができたりと、今までに体験したことのない日々の連続。何もかもが分からない状態のまま手探りで毎日を過ごしていった。そんな中、私にとってある悲劇が起きた。身近な人のコロナの感染。私は頭が真っ白になった。怖くなった。テレビで連日のように報道されていたが、頭の隅では、他人事のように感じていた。コロナが身近に迫ってきている恐怖と家族や周りの大切な人がコロナにかかるのではないかとという不安が大きくなっていった。コロナが、私たちの生活を奪っていった。

私に何かできることはないか。コロナの中でも、きっとあるはずだ。そこで私は、コロナ禍でも学校を良くしたいと考えた。そう、コロナだからといって、私たちの可能性を狭める必要はない。私たちの中学校生活を価値のあるものにするのは私たちだ。少しでも楽しく、充実させていきたい。そんな思いを胸に、私は生徒会長になった。初めての大きな事は体育祭。コロナ禍でも最高の体育祭にしようと、全校で一から企画をし、準備をし、限りある時間の中で、精一杯練習をした。今回の体育祭は、小学校の子

を呼んで行う初めての試みだった。小規模校だからこそできる、最高の体育祭となった。

コロナウイルスが流行してから三年が経とうとしている。これまで当たり前だった生活が当たり前ではなくなり、苦しかった。戸惑ったり、物足りなさを感じたりもした。それはきっと私だけではないだろう。

そんな状況下でも、私たちの生活は続く。私たちは私たちであり続けなければならぬ。これはとても難しいことだ。友達とおしゃべりすること、教室で授業を受けること、マスクなしで体育祭を楽しむこと……。そんな当たり前の日常は、決して当たり前ではない。そう気が付いたのはコロナのおかげである。コロナが生まれてしまった以上、私たちはコロナと共存していかなければならない。それはこの先ずっと続いていく。一日一日に感謝しながら、これから先も生活していきたい。コロナ禍でも、私は前を向いて生きていく。未来は自分で作っていくものだから。

明日はどんな一日になるのかな。

# 令和4年度 山県市少年の主張大会

市少年の主張大会で優秀賞に輝いた2人の生徒の作品を紹介します。



## ケアラー問題を知る

高富中学校3年 村瀬 智香

介護福祉士の不足、虐待、老老介護。これらは全て日本が抱える介護問題だ。その多くは高齢化に起因し、注目を浴びている。一方で、あまり認知されていない問題もある。ケアラー問題だ。

世の中にはケアラーという人達がいる。その定義は、高齢や障害、疾病等により援助が必要な親族等に対し、無償で介護や看護をしている人のこと。中でも特に、十八歳未満の人をヤングケアラーという。私もその中の一人である。私の妹は障がいを持っており、私は日常的に彼女の世話をしている。普段の見守りや、入浴の介助などは毎日のことだ。それでも、そのことを負担に思ったことはなかった。そのために時間をとられることは、ほとんどなかったからである。

しかし、ヤングケアラーの中には多くの人のように生活できない人もいる。文部科学省によると、ヤングケアラーは自由な時間を持ってず、学校に関しても欠席や授業中の居眠り、提出物ができていないことが増加する傾向にあるという。これは、介護により学習時間や睡眠時間など、自分のための時間が減るからだろう。私はこの事実を知って驚いた。他の事をする時間もなくなるほど、介護に時間を割いている子供がいるとは、全く思っていなかったからだ。そして、同時に心配になった。子供の期間は多くのことを学び、人間関係を作る期間だ。いわば、将来のための期間なのだ。そのため、学校

や私生活の中で時間を持っていないことは、大きなダメージを与えるのではないだろうか。

では、どうしたらそうなることを防げるのか。私は、周りの人がヤングケアラーという概念を知り、その存在を認知することが必要だと思う。彼らがどんな負担を強いられ、何を求めているか。自分の身近に存在しているかどうか。これらを知っていれば、学校や家庭での生活の支援も可能になるからだ。しかし、現在のヤングケアラーの認知度は、一般国民の約23%と低い状況にある。私も、自身がヤングケアラーであり、周囲よりも関心を持ちやすいにも関わらず、聞いたことがなかったことで、その認知度の低さを痛感している。それでも、近年は注目されるようになり、テレビや新聞で目にする機会も多くなってきた。一人のヤングケアラーとしてうれし、そのような風潮が広がっていくと、思える。

しかしながら、介護による負担を強いられているのは、ヤングケアラーだけではない。十八歳以上のケアラーも、介護の時間を確保しなければならぬということ、仕事をするにあたって不利になる。どの企業でも、休みを多く必要とする人を雇いたくはないだろう。私も不安を抱えている。就職したら介護と仕事を両立できるのか、自分が高齢者になったら、両親がいなくなったら、自分がいなくなったら、妹の介護はどうなってしまうのか。これは、ケアラーならば皆が抱

く思いだろう。そんな思いに添えて、北海道や埼玉県では条例が出されている。

この条例では、ケアラーへの支援の方針や仕事での無差別化が取り決められている。また、条例に基づき、相談所が設けられている地域もある。私は、この存在はケアラーにとつてうれしいことだと思う。法律によって明確に方針が定まることは、一般の人でも何に気を付けなければいかに分かりやすくなることを示し、ケアラーに適切な対応を取れるようになる。相談所も、自分の悩みを相談し、解決することができる。しかし、この二つの存在があるのは、ごく僅かな地域だ。他の地域でも設けるためには、相談所開設などの意見を述べたり、条例を受け入れたりしやすい風潮にすることが必要だ。そのためには、やはり、周りの人がケアラーについて知るところから始めなければならないと、私は思う。待っているだけでは、駄目なのだ。

統計データなし。これが、現在の日本のヤングケアラー、ケアラーの数であり、この問題に対する現状である。海外では、イギリスなどでは公的なデータが発表され、対策も進んでいる。この違いは、やはり国民の意識の違いによるのではないだろうか。私達が関心を持てば、少しずつ現状は変わるだろう。いや、変えていかなければならない。まだ未知数の人の未来のために。